様 式 C－１９、F－１９－１、Z－１９ （共通）

科研費 KAKENHI

科学研究費助成事業　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８K００１１９

研究課題名（和文）「気」の身体論による拡大ダンス考

研究課題名（英文）Dance as an Art of Bio-Cosmic Subtle Energies

研究代表者
外山　紀久子（Toyama, Kikuko）

埼玉大学・人文社会科学研究科・名誉教授

研究者番号：８０２５３１２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：「気」という中国古代及び日本の前近代から継承された概念に着目し、1960年代・70年代のポストモダンダンスの再解釈を中心にその思想的背景と意義を多面的に捉え、狭義の芸術舞踊を超えた「拡大ダンス」の実践として考察する視点を提示した。関連して、現代アートにおいて近代の「自己表現としての芸術」からポスト近代の「自己変容のための芸術」への移行、さらにテクノロジーの加速度的な進化とともに「プロダクト」（作品）中心の芸術観から「プロセス」（生成の現場の経験）重視への転換が認められると考え、そこに現れてくる芸術の自己治療的機能が、心身及び環境の調整術としての気の身体論の系譜によって明らかになることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
コロナ禍を挟み、生成AIやSNS等情報技術革新がもたらした生活世界の激変の中で、生身の身体の介在する経験の意味を改めて問い直す必要が浮き彫りになってきている。気、及び、それに類する前近代から伝わる考え方は、代替医療や修行・修養とともに、「身体の思想家」にして実践家である舞踊や演劇の領域で命脈を保ち続けているが、身体を持って／身体として、個々の環境に埋め込まれて生きる基本状況を再考する上でも重要な視点を提供する。本研究はアヴァンギャルド芸術の一部の再解釈にとどまらず、身体感受性の開発が、過剰なメディア情報の被膜を破って世界に触れる一助となりうることを訴えるものである。

研究成果の概要（英文）：My research focuses on the notion of Ki/Chi, which has a long tradition from the ancient China, still diversely observed in Japan. In the 1960s and the 70s, the Judson Group (namely, postmodern dance) distanced from ballet and modern dance technique and experimented with non-Western alternative methods, including Ki-based somatic practices (Tai-chi, Yoga, Aiki-do, etc.). Revisiting the historical as well as ideological contexts for this “anthropological turn,” I found it closely related to the shift from modern “art for self-expression” to postmodern “art for self-alteration” in the field of experimental art and music, while the “product” itself seems no longer valued more than the “process”, along with the technological evolution of media and information industry. The process, the experience by the bodily subject, works as a self-medicine/meditation, that is also a crucial part of the Ki system as a transformative art for our body-mind and our environment.

研究分野：美学　芸術学　舞踊論

キーワード：気　身体　ポストモダンダンス　実験演劇　環境　現前

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様 式 Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

⑴「気」及び関連する諸概念（微細エネルギー／プネウマ、スピリトゥス、プラーナ、マナ等々）によって伝承されてきた思想が、舞踊や演劇などの上演芸術にとって重要な意味を持つとともに、現代アートの一部に対する新たな見方・理解の糸口を提供しうるのではないかと仮定し、「musica mundana 気の身体論／宇宙論」と題したシンポジウムを開催、報告書を編集・作成した。多分野の研究領域を横断する関心の広がり、問題圏の射程を確認した。
⑵1960 年代～70 年代アメリカのジャドソン・グループに端を発するポストモダンダンスの研究に際し、「文化人類学的転回」によって非西洋及び前近代の文化・思想・身体技法への接近が見られることに注目し、「気」の問題が関与してくる事例を集積しつつあった。
⑶現代アート制作の一部に、家事労働、特に掃除に代表されるような「再生産的労働」の論理が認められるとした旧課題での研究の発展形として、穢れと浄化（カタルシス）、鎮魂（タマフリ／タマシヅメ）、「気」の調整法としての芸能の起源神話が示す問題群を包含した研究に向かっていた。

２．研究の目的

⑴「舞踊の定義を拡大した」と言われ、同時代の先端的な美術・音楽・映像等と交差を重ねたポストモダンダンスの実験について、その特異なリソースとしての「気」の思想の適用例を吟味することによって、そこで問われ続けた「舞踊はいつ舞踊になるのか」「ダンスと非ダンスを隔てるものは何か」という「ダンス状態」の成立条件を、踊る主体の側の経験に即して明らかにする。そこから、舞踊研究の辺境に位置するポストモダンダンス、それに続くコンテンポラリー・ダンスの実践に新たな評価軸を与える。

⑵「踊る」「舞う」という行為がしばしば意識的主体の制御を外れたトランス状態と結びつけて語られてきたことの意味を、「気」の思想の文脈で捉え返し、境界的両義的身体の問題とともに、自他／内外の区別が明確な近代の「強い主体」、自律的自己同一的主体観を相対化するものとして考察する。

⑶ライブ・アートの現場で生じる、全身的共感覚的な「同期型コミュニケーション」、舞台と客席の間のエネルギーの伝播・交換・共振について精査し、芸術経験の身体性の問題を考える契機として提示する。「アウラ」「現前」「気配」等にも深く関与するものでありながら忌避される傾向にあった（実際取扱注意の）「気」の思想の探究が、その非二元論的・生命論的な自己及び世界把握を通して、アイステーシス＝身体的主体の学としての美学にとって有意なものであることを明らかにする。

３．研究の方法

⑴文献資料や映像データの収集・整理・分析
⑵研究会、シンポジウム、ラウンド・テーブル等を通しての研究交流
⑶舞踊家や身体技法実践家へのヒアリング、ワークショップやパフォーマンス・デモンストレーション、舞台の現場での参与観察

４．研究成果

⑴ダンスと非ダンスの境界を問い続けたポストモダンダンスは、舞踊史・舞踊研究の枠内では十分な検討が困難なラディカルな実験であり、同時代の他のジャンル、対抗文化の種々の思想と実践との関係を視野に入れて考察することで、後続のコンテンポラリー・ダンスや、現代アートの多様な展開の一端に及ぼした影響とその意義を捉えることがようやく可能になる。本研究では、「気の身体」という独自の視点からポストモダンダンスとそのレガシーの再解釈を試み、近代の「自己表現としての芸術」からポスト近代の「自己変容のための芸術」への移行、プロダクト（完成品として主体の外部に残される作品）からプロセス自体の持つ参与主体に働きかける効果への転換を、「拡大ダンス」の実践として捉える視点を提示した。本研究はしたがって、舞踊の一領域を対象とした研究に限定されず、技術・技巧の外部化（身体化されたテクニック・暗黙知から「外付けメモリー」ないしテクノロジーへの依存の増加)、さらには AL による「コンテンツ」の自動生成といった、芸術実践の内実が大きく変わりつつある２０世紀後半以降の状況において、敢えて「歌う／踊る／演じる」プロセスそれ自体＝生身の身体経験の意味を問い直すこととして、舞踊研究をその外に開き、芸術及びその隣接領域の現代的意義に関心を有する研究者に対する訴求力を持つことができた。

⑵広くシアター・アート、ライブの芸術・芸能の核心部分に指摘されてきた、演者と観客・聴衆との間のエネルギー的交流・交感について、「気の身体論」の要件として考察した。パンデミッ

ク時代の配信による視聴覚環境の激変に伴い、「現前」と「臨場感」の錯綜した関係から、複製技術の全盛時代に「アウラ」がその形を変えて復活する可能性を探った。とりわけ、「現前」（presence）のもう一つの意味である「気配・霊気」を糸口として、文学・映画・コミック等様々なメディアに描かれる見霊経験や夢幻能の基本構成を吟味した。トランスないしリミナル状況に入ったパフォーマーの身体の二重性が、複数の時間／次元の共在、非日常の時空の出現を可能にするとともに、舞台と客席といった「見る＆見られる」関係性に特化した距離化の装置とセットで成立していることを検証した。

⑶踊ることの基点にある「気の身体」の前景化――「表層の身体」から「深層の身体」への転換――がどのように起こるのか、ダンスや実験演劇・実験音楽のワークショップ、伝統芸能や武道、修行・修養・稽古・訓練法等の身心変容技法の事例を検討し、能動から受動／中動態へのシフト（為すではなく成る――意志的に動く、表現する、のではなく、動かされる、自ずと動いている）、内と外、自己と他者の区別の溶解、身体を内側から知覚する際の微細な感覚・解像度、脱力（表層筋の緩みと深層筋活性化）、無心・無我・正心、瞑想脳、動物身体／子ども身体への接近といった、共通する特徴を比較考察した。同時に、長期にわたる修行や訓練を前提とする達成と、「インスタント禅」として機能するワークショップなどでの経験、気功や整体などの代替医療の場で出現する特殊な自動運動等、多様な実践の間の差別化の問題が課題として見えてきた。

⑷気の身体に着目することで、アヴァンギャルド芸術の一部の再解釈にとどまらず、「見る」（焦点を合わせた視覚）より「聞く／聴く」「受け取る」こと、身体感受性の意義を主張する足場が得られた。「世界の＜地＞の部分に関心を配って「世界」を豊穣化する」（カスタネダ／真木悠介）、「身体の内側を取り戻す」（片山洋次郎）、「気で聞く」（荘子、心斎論）、「心を空にして初めてインスピレーションが訪れる」（A. Martin）等々の言説が告げる、世界に触れる／世界との融即状態に復帰すること（D. Abram）が、過剰なメディア情報に覆い尽くされ、「大地」との接続が一層困難になった生活環境のなかでどのような意味を持つかを継続して考えたい。

⑸本研究は舞踊やパフォーマンス研究とともに、新現象学、雰囲気学、人文地理学、文化人類学、エコロジー、メディア論等々多分野の知見に触発されながらかなりやぶれかぶれで進行してきた。一定程度、内外の学会（国際美学会議、韓国舞踊学会、表象文化論学会）や研究会（日本科学協会／科学隣接領域研究会、富山大学芸術文化学部、情報科学芸術大学院大学）での報告、論文等の執筆を行ってきたものの、主として研究計画を作成した当初は予見できなかった事態（新型コロナ感染による入院に加え、本研究初年度に発覚した疾病に伴う入院、その後も経過観察と隔週での通院治療が続いていること等々）のために、予定していた単著の執筆・刊行に至らなかった。他方、オンラインでの研究会やワークショップへの参加によって、新しいソースや発想と出会い、異分野の研究者との交流から随時刺激を与えられたことから、継続して研究を進め、頓挫散乱している原稿を完成する見込みである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

1．著者名	4．巻
外山紀久子	-
2．論文標題	5．発行年
上演芸術と歩行：「自然さ」のパラドックス	2022年
3．雑誌名	6．最初と最後の頁
京都国際舞台芸術祭2022 (KYOTO EXPERIMENT Magazine)	72-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）	査読の有無
なし	無
オープンアクセス	国際共著
オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	－

1．著者名	4．巻
外山紀久子	-
2．論文標題	5．発行年
ポストモダンダンスx歩行芸術：ムーシケー型アートの自己治療的側面？	2022年
3．雑誌名	6．最初と最後の頁
アートと地域の協働をキュレーションする	30-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）	査読の有無
10.15099/00021512	無
オープンアクセス	国際共著
オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	－

1．著者名	4．巻
外山紀久子	-
2．論文標題	5．発行年
医術と芸術：浄めのアート走り書き	2020年
3．雑誌名	6．最初と最後の頁
日本科学協会／科学隣接領域研究会ブログ	-
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）	査読の有無
なし	無
オープンアクセス	国際共著
オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	－

1．著者名	4．巻
Kikuko Toyama	なし
2．論文標題	5．発行年
Dance for Life: A Rudimentary Inquiry into the Art for Life Energy	2018年
3．雑誌名	6．最初と最後の頁
Dance Science for Community Contribution	85-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）	査読の有無
なし	無
オープンアクセス	国際共著
オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	該当する

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　4件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 外山紀久子
2．発表標題 歩行について：境界例からのライヴ・アート（生の芸術）考
3．学会等名 第１３回科学隣接領域研究会（日本科学協会）（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 外山紀久子
2．発表標題 ポストモダンダンス×歩行芸術：ムーシケー型アートの自己治療的側面
3．学会等名 富山大学芸術文化学部（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 外山紀久子
2．発表標題 近さと遠さ：息（生／ライヴ）のアートの臨場感
3．学会等名 「臨場感と集合的存在としての人間の拡張―パンデミック時代の科学技術・人文学・アート」（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 外山紀久子
2．発表標題 Vitalist Revival: An inquiry into the aesthetics of life energy
3．学会等名 The 21st International Congress of Aesthetics（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Kikuko Toyama
２．発表標題 Dance for Life: A Rudimentary Inquiry into the Art for Life Energy
３．学会等名 2018 International Symposium of the Korean Society of Dance（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 酒井 邦嘉、千住博、曽我大介、正木晃、前野隆司、安田登、外山紀久子、岡本拓司、前田富士男、松井竜五、安藤礼二、梅干野晁、田中純、後藤文子、岡田憲久	４．発行年 2022年
２．出版社 中央公論新社	５．総ページ数 328
３．書名 科学と芸術　自然と人間の調和	

１．著者名 中島那奈子、外山紀久子　編著	４．発行年 2019年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 377
３．書名 老いと踊り	

〔産業財産権〕

〔その他〕

KYOTO EXPERIMENT 2022 京都国際舞台芸術祭
https://kyoto-ex.jp/wp-content/themes/kyotoexperiment/assets/files/KEX_magazine2022_web+.pdf

電子サイト記事：「劇場の芸術」と「美術館の芸術」のはざまでー京都で、雨だったー、京都造形芸術大学共同研究2013-2018『イヴォンヌ・レイナーを巡るパフォーマティブ・エクシビジョン』（2018年４月よりサイト公開）http://www.nanakonakajima.com/rainer/

「医術と芸術：浄めのアート走り書き」：日本科学協会／科学隣接領域研究会ブログ2020/06/17
https://blog.canpan.info/kagakukyokai/archive/643

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関